

『右近再考』 能勢初枝 著 (スタジオ・クレイ) 277p

高山右近と言えば、まず彼がキリシタン大名であることを皆さんはすぐ思いつくことでしょう。本書は、その高山右近についての人物像、特に優秀な武将でありながら、キリシタンの道を歩み続けたためにマニラに追放されなければならなかったことを詳細に書き綴っています。また、右近と関わりのあった人物、例えば、三好長慶、荒木村重といった戦国大名の知られざる一面も垣間見ることが出来ます。さらに、その当時のキリシタンの遺跡・遺物なども数多く紹介されており、わが国のキリスト教の布教史に興味のある方にはお勧めの一冊です。内容の濃さの割りに結構読み易く出来ているのも、魅力の一つです。

289.1-Nos

『幕末期長州藩洋学史の研究』 小川亜弥子 著 (思文閣出版) 4, 256, xxiiip

江戸時代の洋学と一言と言っても、その分野は医学、天文学、測量術と実に多岐にわたっております。また、砲学、造船といった軍事的なものも含まれています。

本書では、長州藩がその洋学を軍事改革に用いていたこと、そして、吉田松陰や高杉晋作の師である村田清風や中島治平などの国防、特に海防に高い意識を持っていた天保時代の「改革者」たちが、武士・農民など、人々の身分を問わずに部隊を編成し、砲術を教えるなど、当時としては画期的な方法で改革を推し進めていったのが取り扱われています。長州藩については、NHK大河ドラマ『新選組!』でご存知の方も多いと思いますが、長州についてさらに詳しく知りたいという方は、是非ご一読下さい。

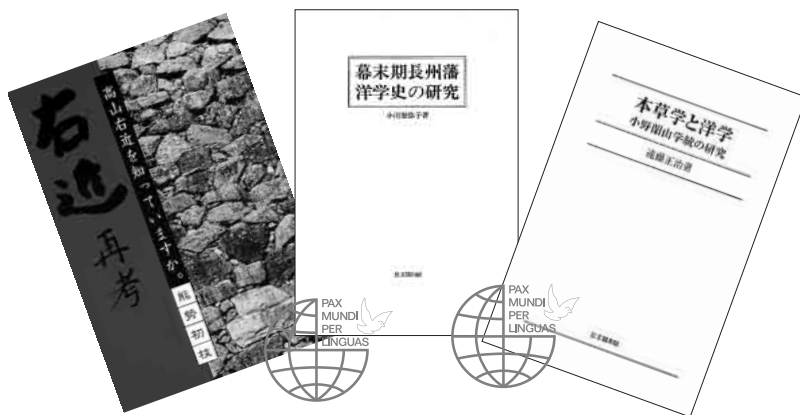
402.105-Oga

『本草学と洋学：小野蘭山学統の研究』 遠藤正治 著 (思文閣出版) v, 409, xxxiiip

本草学は現代の薬学に当たり、西洋の近代科学と並ぶ東アジアの伝統的科学の一つだと言われています。日本は奈良時代の頃より、中国から本草学の知識を取り入れてきました。本草学が入ってからは、時の為政者や学者達の手で、それを日本の学問に体系付ける試みがなされ、江戸中期の小野蘭山によって大成へと向かいました。またこの本草学は、武士・農民の階層を問わず幅広く用いられており、その範囲の広さもあって、明治期に至っても、多くの人々の間で大きな影響力を持ちました。

本書では、小野蘭山をはじめ、数多くの薬学者が登場します。彼らの手によって本草学はどのような発展を遂げていったのか。このような歴史を持つ本草学が、どのような形で洋学と結びついたのか。一千年以上の昔から日本に伝播し、多くの人々の手によって発展してきた本草学の歴史に迫ります。

499.9-End



いなぎ ひろゆき (係)